

## 2010年度第1回中等教育機関日本語教師研修会：報告

今回は、楊家源先生(國立台中技術學院應用日語系講師)、彭春陽先生(淡江大學日本語文學系副教授・系主任)、緒方智幸先生(東海大學日本語文學系講師)をお招きし、「日本語の継続学習－高校から大学へ」をテーマにパネルディスカッションを行いました。

日 時：(台北会場) 2010年5月15日(土) 14:00～17:00  
(高雄会場) 2010年5月16日(日) 14:00～17:00

参加者：台湾の中等教育機関日本語教育関係者 (台北) 11名 (高雄) 15名

まず初めに楊家源先生から、台中技術學院應用日語系は、日本語、英語、商業が出来る人材育成の必要性から1980年に設立された應用外語科を前身としており、應用とは日本語、英語、商業の一体教育を指すことなど、同系設立の背景と経緯、現在に至る沿革等についてご説明がありました。続いて、高校から大学への継続学習の観点からのお話へと移りました。当時の高職生にとって、大学進学には高職から二専(土日クラス)へ進み、そして大学へ編入するという方法しかなかったが、1998年の南台科技大学應用日語系設立以後、初めて高職から大学への直接進学が可能となって一貫性ができ、日本語の継続学習環境が整った。しかし、形ができて中身が伴わず、現状では、本来一貫しているはずの高職と四技で、それぞれ連携のないことをやっており、 $3+4=7$ になっていない現実がある。中学、高校の古文を中心とした伝統的国語教育にも問題があり、母語で読解や作文ができない学生に外国語習得は難しい。また、言語以外の能力も不足していて教養科目が弱く、「内在」(教養、常識)がないため言葉として表現できないという問題もあることが指摘され、 $3+4=7$ になるよう、両者が連携して高職+四技の七年計画を立案していく必要性が説かれました。最後に、高職では「日本語を勉強」し、四技では「日本語で勉強」し、日本語以外の $+a$ を勉強させねばならないと強調され、お話を終えられました。

次に彭春陽先生のお話に移り、まずは既に高校で日本語を学んできた学生への淡江大学日文系の対応状況についてご説明があり、初級日本語を選択制にし、選択しなければ他の科目を12単位選べること、既習者の申請入学枠を倍増したこと、土曜日に4時間高校生向けクラスを開講しており、そこで取得した4単位は大学入学後に認められること、などが紹介されました。そして、高校での重点はどこに置くべきかという、高校での教え方へと話が進み、高校では学生の日本語への興味を引くことが大事なので要求を高くし過ぎないことと、読解と聴解の重要性が指摘されました。学生は話すことを学びたがっているので必然的に聴解に力を入れる必要があり、将来日本語学科に入りたい学生には「聞、話、読、書」の四技能を学習させることが望ましいが、日本語学科以外の学科を目指す学生には読解を中心に教えるべきであると主張され、直接日本語を使わなくても、様々な職業で日本に関して学習したことが役立つはずであること、話さなければ会話能力は減退するが、読解能力は比較的長く維持できることなどを理由に挙げられました。最後に、ひらがなもまともに書けない一級合格者の例を挙げ、ゲームやパソコンばかりで書くことをしない最近の学生のアンバランスな日本語力にも言及され、能力試験に作文がないことも大きな原因の一つと指摘しつつ、初期段階からの書く練習の重要性を再認識するよう促されました。

その後の意見交換・質疑応答では、学習動機が弱い学生の、カリキュラムや教師の努力が及ばない『心態』の問題、学生の国語力の問題、勉強の仕方を知らない学生への指導法問題、五十音や「て形」などの壁を越えさせる教え方の問題、高職と四技の検討会や協力体制確立の問題、入学試験対策に追われ「話す」「書く」学習の余裕がない現状について等々、様々な問題について意見が交わされ、討論が行われました。

以上のように、今回は、やや少な目の参加者ながら、非常に多くの有意義な意見交換が行われた研修会となり、終了後のアンケートでは「制度的なことなどがわかり、参考になった」、「高職と四技の現状について少し知ることができて助かった」などの好意的な感想の他、「高職の生徒は授業態度が大変受け身で、落ちこぼれ的な雰囲気があるという話があったが、やる気のない生徒に対して興味を持たせるような授業をするにはどうしたらいいか、力をつけさせるにはどうしたらいいか、具体的な解決策や成功例があれば聞いてみたいと思う」、「もっと研修会を開催していただければと思う」など、今後の研修会に向けての建設的な意見も寄せられました。

楊家源先生



彭春陽先生



緒方智幸先生



研修会の様子

